OCUAC

大阪市立大学山岳会会報　NO.38　2004. 6

２ピッチ目は腕力と上体のフリクションをうまく使わねば乗り越えられない箇所で、極めて困難。佐々木さんが抜けたあと、３人掛かりで吉村さんをクリアーさせる。
ここからは主稜線に着くまで左右に常に大きな高度感のある行程を持った尾根を辿ることとなる。ヨーロッパアルプスと同様の風景で逃げ道はなく登るだけだ。アイゼンを締めなおす。２度目の懸垂降下を終えた後更に一箇所、ザイル登行。ここでアンザイレンを終え更に 150mほど雪面の高度を上げて稜線に着く。もう１６時を廻っている。依然、明るい太陽の下にあるが、西方には何層もの雲がこちらを窺っている。大休止のあと佐々木、山田は一気にＢＣまで駆け下る。あとの二人は月明かりの中をゆっくり、ゆっくり下ってくる。テント中から何度も二人のヘッドランプを確かめる。２３時過ぎ帰着。兵頭君ご苦労さん。　（岳沢合宿　コブ尾根登攀より）

OB 支援のもと、無事穂高の稜線へ足跡を残した岳沢新人合宿
左端より　塩見、和田、関、小椋、澤　（現役ページより転載）

現役５月岳沢合宿に参加して

（４／３０－５／４）　　Ｓ４２卒　山田　裕敏

３月末には期待を膨らませたものの、４月半ばにはあきらめの境地となり、連休前にどんでん返しがあったりと現役の新人リクルート活動は今年も波乱含みで展開中です。

そうした中での5月山合宿で、山行の主役たる現役諸兄の参加日程の固まりに時間を要し出発日も2日に分かれましたが、2年生2名　新人3名計5名の参加者を得て、現役新人合宿の形は整いました。
ＯＢのほうはいつもの佐々木さん、63 年同期入部組の佐藤・島川・山田３名と兵頭君。それに今や賛助会員格の吉村さん。

合宿地の「岳沢」は38年前９人の新人を迎え、当時2年生の小林治俊、奥田寛君達と遊んだ思い出の地で、９名のうち２名は亡くなってしまいましたが、大島・広瀬・澤井・兵頭の諸兄は今も遊び仲間として健在です。典型的な北アルプスが手じかに楽しめて、その割には登山者が少ないこの山域での5月山は、新人合宿の適地としての実績がありますので、新しい方々の今後の飛躍のための踏み板になれば、と計画した次第です。
天候に恵まれず、予定の行動計画のうち残念ながら半分以上が未消化に終わりましたが、奥穂まで往復した小椋君他のパーティは中身の濃い行動ができた事と思います。

尚、この山行に藤村達夫氏から「五目鶏おこわ」等ｱﾙﾌｧｰ食を大量にご寄贈頂き大変好評でした。総会参加各位から頂いた現役へのカンパ共々、ありがたく厚く御礼申し上げます。

＜行動概要＞

４月30日夜
現役　　小椋、塩見（理院１）、関（法３）
ＯＢ　　佐々木、島川、山田、兵頭、
　　（吉村）離阪（京）

５月１日　（快晴）
上高地　６：30　――　BC（岳沢ﾋｭｯﾃ付近）
９：30　ＢＣ設営完了　12：00
午後　BC 付近にて雪上訓練（上記メンバー全員）
同夜　現役　澤、和田（経１）ＯＢ佐藤　離阪

５月２日　（快晴）
現役　３名　出発５：00　奥明神澤――前穂――奥穂――前穂――17：30ＢＣ
ＯＢ　４名　出発５：20　コブ尾根―天狗のコル――18：30ＢＣ
後発組　３名　ＢＣ入り、午後　雪上訓練
　　（島川、佐藤、澤、和田）

５月３日　（雨のち曇）
現役全員　　ＢＣ　――天狗のコル往復
ＯＢ　島川　下山　　他は沈殿

５月４日　（雨）　全員下山

コブ尾根登攀

２日の天気は日没過ぎまで快晴・無風状態が続くと判断。現役独自での行動への指向を雪上訓練での足取りを見て了承し、この日は現役、ＯＢ２隊に別れ行動することとした。
コブ尾根行きのメンバーは、佐々木・山田・兵頭・吉村の４名。
５：20　ＢＣ出発。岳沢小屋から左に折れる。ﾍﾘｺﾌﾟﾀｰ着地点あたりから天狗沢下部を行くと右側にコブ沢が見えてくる。この沢を登る。先

2

行パーティが3つ、等間隔で雪渓上に展開している。先頭はもう核心部取付きに近い高度に達している。彼らは暗いうち、そう3時ごろから行動を開始したものと思われる。さあ、高度差約千メーターの登高の始まりだ。雪上には時折雪崩の跡を見るが雪は締っており、快適に高度を上げる。10 時ごろコブの基点に着く。昼食を摂りながら先行パーティのコブの登攀を眺める。ここまで来るとコブは相当大きな岩峰で、登攀ルートは谷筋から正面に取り付くものから、右側面を登るものまで何通りもあることが判る。急峻な雪面歩行からの接続が容易に取れるので、先行パーティは右側面から取り付いている。岩峰の傾斜から言えば正面からが緩く、右に行くほど難度が増える。先行パーティのアイゼンのガリガリ音と登攀の緊張感を反映した声が響く。吾が方はここでアイゼンを外す。彼らのルートを追ってまず兵頭が岩に取り付く。ややかぶり気味の岩溝で2～3箇所の残置ハーケンを使うが、かなり困難。とは言え、日は暖かく明神や吊尾根が見通せる明るい岩場での 10mほどの高度を持つ難場での余裕の登攀だ。
2ピッチ目は腕力と上体のフリクションをうまく使わねば乗り越えられない箇所で、極めて困難。佐々木さんが抜けたあと、3人掛かりで吉村さんをクリアーさせる。
ここからは主稜線に着くまで左右に常に大きな高度感のある行程を持った尾根を辿ることとなる。ヨーロッパアルプスと同様の風景で逃げ道はなく登るだけだ。アイゼンを締めなおす。2度目の懸垂降下を終えた後更に一箇所、ザイル登行。ここでアンザイレンを終え更に 150m ほど雪面の高度を上げて稜線に着く。もう16時を廻っている。依然、明るい太陽の下にあるが、西方には何層もの雲がこちらを窺っている。大休止のあと佐々木、山田は一気にBCまで駆け下る。あとの二人は月明かりの中をゆっくり、ゆっくり下ってくる。テント中から何度も二人のヘッドランプを確かめる。23時過ぎ帰着。
兵頭君ご苦労さん。
（山田裕敏　記）

五月山報告

（2004・4月30日～5月4日）

現役リーダー　小椋 剛

4月30日（金）　晴れ
21：30（難波）～23：00（京都）・・・
さる4月26日月曜日、急遽、新入部員の関君と和田君の合宿参加が決まったので、短期間のうちで装備を揃えたり、食料買出しに行ったり、足の手配・計画書の変更したりするのは中々大変であったが、二人のおかげで気分は一層乗ってきた。
反省事項を初っ端からいくつもこしらえてしまって、計画書を出発当日に緊急連絡先・山岳部顧問に提出する、共同食料・装備のパッキングを出発直前にやっとこさ終らせる、計画書を部員全員に渡せなかったなど、時間が無かったためとはいえ、普通ではあるまじき事をいくつも催してしまった。
それでも何とかすべての用意を終えて、21：00ごろ JR 難波 OCAT に到着。澤と和田君は5月1日出発なので、現役は塩見さん・関君・僕、OB は佐々木さん・山田さん・島川さんというメンバーで、さわやか信州号にていざ出発。ひさびさの山で心踊っていたが、睡眠不足気味だったので車窓の夜景など楽しむ間もなく、沢渡までうつらうつらと眠り続けた。
5月1日（土）　晴れ
5：00（沢渡）～5：30（上高地）～6：30（出発）～9：30（岳沢）
テント設営（10：00～12：00）　雪訓＋奥明神沢偵察（13：30～15：40）
19：00（就寝）
沢渡からは例の低公害バスに乗り換え、30分後上高地バスステーションに到着。ステーションの建物にはイワツバメが大勢巣を造っていて、ジュリジュリジュリ飛び回り鳴きまくっていた。
6:00ごろに兵頭さん・吉村さんも加わり、朝飯がてら雑談したり写真撮ったりして6：30分ごろにぎやかに出発。視界良好―残雪の穂高連峰が実に良く見える。あの稜線を歩くということは一体どんな経験になるだろうか、と、重い荷物を担いでの歩き始めとしては、テンシ

ョン高く中々気分もよろしい。ステーション周りにはわんさと人とツバメがいたが、30分ほど歩くとあっという間に自分たちだけになった。

歩き始めて間もなく、4人組の大学山岳部パーティと思われる一団が、同じく岳沢に向かっているところに遭遇したが、おそらく佛教大学のみなさんということが後になって分かった。

3月とは違って、上高地の雪はすっかり溶けていたが、木の芽は芽吹き始めたばかり。そんな中を、小鳥のさえずりがあちこちから聞こえてくる深い森の中を通り抜け、一時間半ほど歩くと、だんだん木がまばらになってきて雪が現れ、少しずつ深くなってきた。岳沢に近づくにつれ視界が開けてきて、穂高連峰が大きくゆったりと目前に見えるようになった。とても天気がよく、温かく、あと荷物が軽かったら完全に春ののどかなお散歩、といった気分だったで、ときに道を横切る形で雪崩の通った跡がついていてそこら一面の木がなぎ倒されていたりしていたにもかかわらず、あんまり雪崩の恐ろしさの実感も湧かなかった。

岳沢の小屋が見えるところまできて、テント場があるはずなのに、何故かテントを張れるような平坦な場所がどこにもない。で、しばらく論議していたが、結局積雪期は斜面を整地して張る所なんだろうという結論に達して、スコップとスノーソーで楽しいテント場作りが始まった。現役・OBで協力しあって、スノーソーで雪に切れ込みを入れる・切れ込みを利用してスコップで雪ブロックを掘り取る・雪ブロックを斜面の低いほうのから積んでいく・積んだブロックでテントが張れる位の平坦な土地が築けたら、ブロックの上をドンドン足で踏み固めてデコボコをなくす、という作業を2時間余りしてようやくテントサイトが完成。このころには入山者も増え始め、岳沢沿いの斜面には小さなテント村が形成されつつあった。ただ、ここのテントサイトは岳沢小屋とは岳沢を挟んで対岸にあったので、大きな方がやりたくなったときが大変。往復に20分ほどかけていかねばならなかった。

少し休んでから恒例の雪上訓練に行くこととなったが、ここでヘマを一つやらかしてしまった・・・シットハーネスのつけ方がよく分からない。兵頭さんに手伝ってもらってやっと装着したときには、とっくにみなさん準備し終わっていて、外で待っていた。部長なのに・・・前もってつける練習しておくのが当然なのに、やらなかったのは重大な過失でした。

テント場から岳沢へ下る斜面が中々急だったので、兵頭さん指導の下、そこで雪上訓練。もうお昼過ぎで雪がベチャベチャだったのでアイゼンはつけず、雪上歩行・ピッケルによる滑落停止・急斜面の直下降などやった。塩見さんはもう雪に慣れているし、関君も大して斜面にびびっておらず、2人ともうまい。僕の方はあんまし去年と変わらないような気がした。

一通り終わったら、明日の偵察ということで奥明神沢のとりつきまで登り、OBからルートのとり方などについてアドバイスを受けるが、去年ビビッてしまって剣岳にも登れなかった僕が、果たして、先頭に立って無事に奥穂に登れるか不安になってきた。で、一応念のためザイルワークとして、コンテニュアスと、ATCによるビレイの仕方を教えてもらいながらテント場に戻ったが、本番でやっても余計危険だろうと思った。

夕飯はスパゲティだが、ソースが足りなくて不味い不味いの連発。口直しにスープを作ってみたら、こちらは何とか美味くいって、不味い飯のため不快な夜をおくるのは避けられた。

5月2日（日）　晴れ

3：00（起床）～4：50（出発）～7：30（前穂高岳）～11：10－11：40（奥穂高岳）～14：30－15：10（前穂高岳）～17：00（テント場）～19：45（就寝）

山の起床は、目覚ましが鳴っても無視して寝たふりをするのが常だけど、今日の行程はそれが許されないので3時にキッチリ起床した。OBさん方から無償提供していただいた@米を食べて、まだ夜が明けきらないうちに出発。ずいぶん早く出たなあと思っていたが奥明神谷には早くも10人近くも先に登っている人がいた。

沢は雪で埋まっていて、周りを高くて大きな岩の壁に囲まれ、今まで見たことのない景色だった。雪がコチコチでアイゼンの歯は良く効き、しっかりしたバケツもあるものの、登るのに比例して傾斜がきつくなり段々緊張してきた。ああ・・怖い～・・と思っていたが、今年はさすがに口に出すことはできないので、やせ我慢して必死に登るが、傾斜はますます厳しくなるば

4

かり。バケツは大きくてしっかりしているのでよっぽどのヘマでもしない限り落ちるはずはないと、分かってはいるものの、滑ったらどこまで落ちて行くのだろうと考えるとあそこが縮む思いがした。腰を下ろして休めるような傾斜は全くなく、ある所では、凍りついた岩の上を歩かなくてはならない難所も出てきて一向に気が抜けない。

結局休みなし2時間半ぶっとうしでやっと前穂頂上に着いた。しかし関君は、本格的なアイゼンを履くのも初めてなのに、何も言わず登ってしまった。たいしたものだ！本当は僕が関君をフォローしなくちゃならないのに、自分のことでせいっぱいで何もできなかった。

まだまだ行程が長いので、休憩もほどほどに吊尾根へむかう。前穂までは１０人ほど中高年の人がいたが、ここからは僕たちだけ。吊尾根は見た感じかなり険しそうだが、豪快に奥穂高岳に突き上げている様子は登山意欲を掻き立ててくれるに十分だった。

尾根の最低部までのくだりは雪も余りついていないので、アイゼンをはずして、夏道・冬季ルートと交互に取りながら岩稜上をそんなに苦労なく下りられた。最低部でクライムダウンしなければならない難所にでて、それを無事下ったところから尾根の後半戦といった感じになり、先の登りルート上には雪がたくさん着いているのが見えたので再びアイゼンをつけた。

後半戦では、トレースにしたがって急斜面をトラバースするところが何箇所も出てきたが、雪山初心者の関君も大して怖がっている様子もなくついてくるし、稜線にしては風が弱く、おまけに天気がよく、雪庇も小さいのが所々にでている程度で、何とか奥穂までいけそうな気がしてきた。今回のルートでの問題は、技術的なものよりむしろ体力的なものだった。で、奥穂に群れ集まっている人々や、ケルンが乱立する様子が見えてきたころ、歩いている様子を写真に撮るため関君に前へいってくれるよう頼むと、風が吹くたびに明らかに体がフラフラ揺れている。思わず笑ってしまったが、同時に帰りが大丈夫か少し心配になってきた。

１１：００過ぎ、奥穂登頂。２人とも喜んでいる。登れて本当に良かった！これは２人が優秀だったおかげ、天気がよかったおかげで、自分はむしろ２人に後押しされて登れた。持ってきた大ぶりのウィンナーを３等分しかぶりついたり、美味い水を飲んで景色を楽しみながら、一休みしたのち、帰りがまた長いのでゆっくりする間もなく再び吊尾根へ。

もう日が高いので雪はくしゃくしゃ。足が疲れ始めていたので慎重にトラバースをくりかえし、吊尾根最低部に到着。ここで、行きしなクライムダウンしたルートの他に、更に下方の斜面にも一つ別のトレースがついていたので、こちらにルートをとることにしたのだが、ここで失敗してしまった。ルートは、まもなく垂壁に近い斜面をトラバースしていたが、雪がボロボロなのでとてもやばい気がする。でも、その斜面の下のほうはかなりゆるくなっているし、雪も柔らかいし、もし落ちてもすぐ止まるだろう、それに引き返すのも何だしなあ、と、右足、そして左足、と両足を斜面上のバケツに乗せたとたん、ガクンと両方いっぺんに崩れ落ちてしまった。ワッ！と思った瞬間、左足が雪の下に隠れていた岩に引っかかって転落は免れた。言い訳無用に、軽率な判断だったが、またひょんな所で繰り返しそうで怖い。

気を取り直して緩そうな岩壁を、アイゼンをはずしてから稜線まで直登する。自分としては大した事はない岩登りだと思ったが、後から聞くと関君は少し怖かったらしい。登りつめると稜線上のルートも見つかり、疲れた体にこたえる登りを続けやっと前穂高岳に戻ってきた。思いのほか人が多く、頂上に整地してテントを張ろうとしている人までいた。

そしていよいよ恐怖の下降ーロボットのようにギクシャクしながら僕は冷汗まみれになりながら下りていくーみんな大丈夫かなあと思いきや・・・塩見さんは猛スピードで降りていくし、関君も全く平気で、気がつけばビビッているのは自分だけ。塩見さんにコツを教えてもらって真似しようと少し歩速を早めるとスッテンコロリン・ズザザザザ～・・・と尻餅ついてしまう。何でだ～と、少しへこみながらの下降となった。傾斜が緩くなってくると塩見さんが尻セードを始めたので自分もまねする。非常に爽快、あっという間に下山できた、が、アイゼンでヤッケのズボンに穴を開けてしまった関君は可愛そうに歩いていた。

往復１２時間のハードな一日を終えてテントに戻ってくると、後発隊の澤と和田君がキム

チ鍋を作りながら待っていた。彼らは雪訓をした後、前穂の取り付きまでいってきたらしい。
５人来てテントはかなり狭くなったが、それでもみんなで楽しく食事して、ゆっくり寝られた。

5月3日（月）　曇り
３：００（起床）～７：１５（出発）～７：５０（岳沢小屋）～８：００（天狗沢入り口）～１０：００（天狗のコル）～１１：００（天狗沢入り口）～１９：４５（就寝）
今日から天気が崩れてくるとかで、朝から稜線は白くて分厚い雲に覆われていた。それでも、粕の様な雨が降ったりやんだりしていた程度だったので、天候が悪くなってきたらすぐに下山するということで、天狗沢から天狗のコルまで登ることにした。メンバーも、昨日の奥穂組みはかなりテンションが低かったとはいえ、五人全員参加という形になった。
天狗沢上部から稜線はガスっていて何も見えない、せいぜい３０～５０m先までみえるていど。入山者も沢の下部で雪訓していた１０数人以外は、僕たち五人だけだった。沢は昨日に比べるとずいぶん緩やかで、雪ももう少し柔らかければアイゼンがいらないくらいだし、トレースもしっかりしたのがずっとあって、登るだけという点ではそんなに大した事はなかったが、視界が悪い・天候が崩れかけている・まだ新しくて、しかもかなり大きそうな雪崩の跡があるなどで、不安材料もいくつかあった。特に雪崩はほとんど予備知識がないまま来てしまったので、斜面に大きな亀裂が入っているところに出くわすと、ただいたずらに不安になるばかりで、もっと予備知識を増やしとくべきだったと思うばかしだった。
もやの中から雷鳥の、グゥワァ～、グォ～ェ～と言う声が時折聞こえるが、やっぱ何にも見えない。で、稜線が全く見えないまま、段々傾斜がきつくなってきたなあと思っていたら、あっけなく頂上に着いた。まあよくやったでしょう、と、何となく物足りないような雰囲気で、一休みしてから下山。和田君も全然平気なのに、またしても僕だけビビッてしまった・・・。雨も降らないまま何事もなくテント場までもどれた。
テントに戻ってくると、兵頭さんが、二時からスキー大会をやるぞと言って、ショートスキーを用意してくれていたので、澤が早速滑っていったが、結局雨で中止になってしまった。それならば、という事でトランプ大会になると、和田君が伝説を作った。

5月4日（火）　雨
６：００（起床）～９：３０（出発）～１１：００（上高地）
ますます天気が悪くなるそうなので現役・OB ともに下山することとなった。雨の中の撤収となったが、僕の指示に問題があり、テント撤収が一番最後になってしまい、後で塩見さんから、まずは共同装備からしまわなあかんのだよ、と注意された。
時間がたつにつれ雨は激しくなり、土砂降りの中上高地まで下り、その後、バスも予約なしでもあっけなく乗れ、釜トンネルで油がまき散らかされて一時通行止めになりバスの出発が遅れるというアクシデントもあったが、無事２２：００過ぎ大阪に着いた。

＜　澤　真平君　の感想＞
今回の春山は岳沢に行きました。僕は新人の和田君を連れて２日目からの参加となりました。３日目は天気が悪くなり、天狗のコルまでの登頂。４日目も雨が降ったためあえなく予定を早めて下山しました。今回の反省点はやはり体力の低下。最近はますます体が衰えていきます。腰も治らないし、年ですか。

＜新人　関　智弘君の感想＞

正直、こんなに充実したゴールデンウィークを送れたのは、久しぶりだった気がする。何といっても、やはり奥穂のことが一番忘れられない。とにかく、きつくてきつくてたまらなかった。頂上目前では、風に吹かれてフラフラしたほどだ。せっかく頂上についても、うれしいのはうれしいのだが、それを実感する余裕が心になかった。でも、行動食と水のうまさは格別だった。帰りになっても、恐い所がたくさんあった。岩のルートは、登る時に足がガタガタと震えていた。恐怖か疲れか、もはや分からなかった。テントに戻った時は、とにかくホッとした。

待っていた澤君や和田君を見たら、帰ってこれたんだなあと実感できた。足は、ずるむけになるし、膝も痛かったし、苦しかったし、でもとっても楽しかったなあ。また、早く山に行きたいなあ。

＜新人　和田　典之君の感想＞

感想としては突然このような本格的な登山をすることになって不安も少しあったんですけど、無事に終ってよかったです。上まで登れなくて残念だったねとかなり言われたんですけど、初回だったんで自分としてはますます納得しています

＜新人　塩見修平君　５月山の感想＞

僕は大学学部時の４年間、信州の山を楽しんできましたが、どんだけがんばっても、その４年間ではしたくてもできなかった高度な山を、最初の新人山行でしてしまうこの山岳部のレベルの高さに、正直驚きました。驚くとともに、これでいいのかという疑問もわきました。今回の５月山の感想は、今後の山岳部を考えて、良かったと思ったところよりも、失礼かもしれませんが、あえておかしいなと感じたところを書いてみます。

① 計画段階
　計画自体を現役の部員自身もくわしく知らないということ。計画はOBまかせであるということ。

② 山行きそのもの
どれくらい体力があるのかということを一切知らずに、新人をあのレベルの山にいきなり行かすということ。結果が、良かったからいいものの、もしものことがあれば・・・。

③ 全体をとおして
OBさんたちの面倒見の良さは、非常にありがたいし、OBさんたちの力があったからこそ、あのようなすばらしい経験ができたと思います。しかし、現役部員にとっては、OBさんたちの力があまりにもすごいために、それに甘えてしまっているという一面もあります。この５月山を振り返ってみると、OBさんたちに連れて行ってもらったという感じが残ります。登山の楽しさのひとつには、みんなで計画を立て、その計画をみんなで成し遂げるという達成感が重要なのであって、どこどこのピークに立つということ自体が目的ではないはずです。そういった意味では、連れて行ってもらっただけという現役部員としては、達成感が得れないで不完全燃焼だったように思います。また、このような形での登山が続くと、先輩から後輩へと山の経験や技術、知識を伝えることができない状況になるのではないでしょうか。なぜなら、その先輩もOBさんたちに甘えていたために、OBさんたちなしでは、計画すらろくに立てられないという状況になりかねないからです。面倒見のいいOBさんたちがいる時ならともかく、これから何十年と続くだろう山岳部のことを考えると、決していい状況とはいえないように思いました。

④ 現役部員の反省すべき点
OBさんの与えられた課題をこなすという受身の態勢で山に登っている点。登山というのは、能動的になってこそ充実したものになるのではないでしょうか。

⑤ ①～④を踏まえた上で今後の部の理想像
山に登る主体は、現役部員たちであるということを自覚し、部員が能動的に山に登る部になるということです。その上で必要な技術、経験が求められる登山をするなら、層の厚いOBさんたちの協力をお願いするという形はいかがでしょうか。

2003年大阪市立大学山岳部冬山合宿

北アルプス編

<メンバー> C．L・装備　　小椋　剛（理学部・生物学科　1年生）
　　食料・気象　　木野　英史（法学部第2部・法学科　1年生）
　　OB　　片岡　泰彦

2003年12月26（金）～27日（土）　晴れ～雪

1：00（雪線）～5：45（起床）～6：30（出発）

小椋：　冬型が強まって、飯田を過ぎた辺りから降りだした雪が、雪線に着いた時には相当激しくなっていた。雪線には大勢の人が集まってにぎやかだったが、適当なところで就寝。せっかく寝心地のよいところで寝転がれたのに、モソモソモソモソしていて結局一睡もできなかった。あーあーと思っているうちに夜は明けてしまい、おにぎりをいただいてから出発。すっかり晴れ渡っていて山が朝日に染まっていた。

木野：　僕にとっては初めての雪線訪問である。正直言って想像していたよりもこぎれいで、OBがよく利用している理由が納得できた。ここで澤と合流（朝にはまた別れるが）。2階に展示してある小林さんの写真を鑑賞する。小林さんほどは無理にしても、いい冬山写真が撮れればと願っていた。モソモソ小椋とは違い、すぐに就寝。起床後、シュラフで気持ち良さそうに寝ている澤が非常に羨ましく、油性マジックでヒゲでも書いてやろうかという衝動に駆られながらも雪線を後にする。

2003年12月27日（土）　晴れ～雪

～10：00（葛温泉出発）～10：40（七倉）12：25（高瀬ダム）
～16：50（無名小屋）～19：45（就寝）

小椋：　上高地に行く八木さんと佐々木さんとは松本で別れ、ここから僕が車のナビゲーションすることになったのだが、道の選択を誤った上、それから間もなく気持ちよく寝てしまった。葛温泉からは降り出した雪の中をえんえんと平坦な雪道を歩く。

木野：　小椋を車内で寝させないために助手席でナビゲートさせることにしたが、それでも睡魔には負けてしまうようだ。ナビゲートが不慣れなのか、人とのコミュニケーションが苦手なのか、片岡さんよりダメ出しを受けていた。冬山が初めてである僕は出発地に近づくにつれ、だんだん不安になってくる。

小椋：　風は弱く、積雪は30～40センチメートル、踏み跡もしっかりあったがとにかく長い、結局湯俣尾根の取り付までもいけず無名小屋前でキャンプすることとなった。

木野：　七倉ダム～高瀬ダム間はどうということはなかった。しかし、高瀬ダム～無名小屋までは一人バテ始める。元々トレーニング不足だったのが露呈した。しかも僕のせいで当初計画のC1地点まで行けなかったことで、体力よりも精神的につらくなってきた。自分自身のふがいなさに腹が立つ1日だった。体力的・精神的疲労とともに、これ以降、写真撮影枚数がガクッと落ち始める。

2003年12月28日（日）　快晴

4：15（起床）～6：30（出発）～8：50（湯俣尾根取り付き）～10：15（展望台）～16：00（湯又岳）～17：00（テント場）

小椋：　目が覚めてテントから顔を出すと晴れていた。昨日の残りを歩ききったのち、いよいよ湯俣尾根に取り付くが、先行パーティのトレースがしっかりと残っていたのでワカンではなくアイゼンをつける。結局そのパーティに追いつくことは無く、人と会ったのは、昨日今日で硫黄尾根へ行くパーティ1組と北鎌尾根へ行くパーティ2組だけで、その後は下山するまで誰一人として出会わなかった。トレースがついていて、ラッセルの必要が無いとはゆうものの、深雪の上を歩くのが始めての僕は何度も雪の中に足をもぐらせて、抜け出すのにえらく体力を消耗した。全くもってすばらしい晴れで、雲ひ

8

とつ無く、展望が開けると雪をかむった餓鬼岳・燕岳・大天井岳・槍ヶ岳などが必ず見えた。初めて見る冬の山並みにすっかり見とれ、静かなのがまたよい。

木野：　重い気分のまま、出発の準備をする。体力では小椋に負けるが、出発準備の手際の良さなら彼より上だ。前日と違い、最初からそれなりに雪深く、スノーシューの跡があるだけでも非常にありがたかった。他の二人に比べ僕は体重移動が下手なのか、一歩一歩踏みしめるたびに深くはまってしまう。ヒザまでならまだよいが、腰まで十数回、首まで数回はまり、天気・景色が最高なのにあまり楽しむヒマがなかった。

小椋：　木野君がやや遅れたが、樹林帯の長い雪上歩行の後、１６：００ごろなんとか湯俣岳に登頂。鷲羽岳・三俣蓮華岳方面にも展望が開け、夕焼けが迫った山並みに何となくトロトロとした気分にされた。僕だけ先にテント場に行き、偵察山行のときと全く同じ場所にテントを設営。針葉樹に覆われたコルなので全くの無風だったが、日が落ちて暗くなるのと同時に急に冷え込んできた気がして、早く暖かいものを口にしたくなった。テントに入った時には真っ暗・寒い、天気図は二日連続でとれず、入り込んだ雪が解けるのがなんとも不愉快だったが、温かいお茶一杯ですぐにご機嫌となった。今日は少々疲れた。ラッセルが無いのにこんなんなので、ラッセルがあったら・・と思うと、何だか自分の体力にかなり自信がなくなってしまった。

木野：　とにかくヘトヘトだった。一歩進んでは雪に深くはまり、また一歩進めるとさらにはまり、の連続で、一体自分はこんな人のいない所で何をしてるんだと思ってしまった。別に答えがほしいわけでもないのに片岡さんに、「なんで山に登るんですかねえ？」と聞いたり、どんどん見えなくなっていく二人に対して追いつかなければならないのに、首まで雪につかったままボ～ッっとしていた。先にテント設営に向かった小椋がものすごく頼もしく見え、失礼ながら山岳部入部以来初めて、「さすがリーダーやなあ。」と感じた瞬間だった。

２００３年１２月２９日（月）　晴れ時々雪～風雪

４：３０（起床）～６：２０（出発）～１２：３５（テント場）～１３：４０（テント設営）～１７：３０（寝る）

小椋：　朝早くは薄日が差し、雪もちらつく程度。今日は樹林帯から稜線に出るから体力的には昨日ほどつらくは無いだろうと思っていたが、稜線に出て間もなく吹き溜まりのラッセル。傾斜がきつくなるにつれ雪が胸まできて、進もうにも、サラサラの新雪のためでもあって、足場を作っても乗るたんびに崩れ、ぜんぜん上へ登れない。ずるずる同じ場所でもがいているうちにすっかり疲れてしまって、結局トップを代わってもらった。このころ一時晴天となったが、つかの間で、次第に曇ってきて、風も強まってきた。

木野：　相変わらずしんどいが、ラッセルはそれなりに楽しめた。不思議だ。

小椋：　やはり稜線上は雪が少なく、夏道も所々出ていた。南真砂岳越えて、偵察山行の時も問題になった箇所へ到着。稜線上を行くかトラバースするかということだが、片岡さんの判断によりトラバースすることに。結構急な斜面だが、雪がやわらかいので滑落する心配はしてなかった。ただ、一箇所だけ雪の下に岩が出ていて、しかもかなり急なところがあり、急に弱腰になったが、木の枝をつかみ、アイゼンの歯を滑らさないようにして何とか突破。高度感もかなりあって今日のなかで一番緊張した箇所だった。

お次は真砂岳の巻き道。晴れてれば何とも無いだろうに、この頃には風が相当強まり、雪が舞い上がってホワイトアウトし、視界が利かない。僕がトップにいたが、いつの間にか上へ登りすぎていやしないか、下へ行き過ぎていやしないか、そのため稜線へ出られないのではないか、かなり不安な気持ちのまま歩く。片岡さんが、引き返してもいいぞ、と言ったが、一瞬視界が開けたときに水晶岳へ続く稜線が見えたので前進した。すると間もなく分岐を表す道標が現れたので、やっとトラバース終わりと、ホッと一安心・・・ところが次の瞬間木野君が十メートルほど滑落。更に一分もたたないうちに、何でもないところで今度は僕が転倒。最後の最後に気を抜いた僕たちに、さすがに片岡さんも気を悪くした。

水晶岳へ向かう稜線上でキャンプすることに。風のできるたけ弱い所を選んだが、それでも強烈なのが時々来る。寒いし雪まみれになるしで、

早く張りたいが、テントはあおられ、せっかく打ったペグは引き抜かれでなかなか進まない。その最中僕が不用意にくくりつけていたテントシートが風に飛ばされてしまったが、二人とも何も言わず許してくれた。さらに、テントも危うく飛びそうになったが、今度は片岡さんがヒモ一本つかんでいたおかげで事なきを得た。一時間近く掛かってようやく設置。中に入って温かいお茶を飲むと、もう外へ出る気は無くなった。久々にテントの中でのんびりできて、天気図も書けた。寒冷前線がまさに通過中で、夜は一段と激しい風に加え、強い雪。

木野：　ラッセルが終わり、雪深くなくなったので、足取りが軽くなる。ホワイトアウト状態のトラバースだが、深雪を踏み抜くことと比べたら全然苦にならない。というか、むしろこういう所のほうがウキウキしてしまう。この時は精神的にやや立ち直りつつあり、「北アルプス、ダムのそば、ホワイトアウトとくれば、織田裕二状態やん！」とわけのわからないテンションであった。

別に油断していたわけでもなんでもないのだが、突然滑落。「生と死の分岐点」という本で、「滑落時は恐怖や痛みというものを一切感じないらしい。」という記述があったが、まさにそうだった。一瞬何が起こったのかわからないまま滑っていく。しかし気が付くとピッケルで滑落停止動作をしていた。雪上訓練は5月合宿以来行っていないのだが、体が覚えていたようだ。フカフカの雪だから良かったものの、アイスバーンだったら間違いなく止まらない。この後、片岡さんにこっぴどく注意されたのは言うまでもない。

テント設営場所が決まったが、相変わらず風が強い。小椋のくくりつけていたテントシートが吹き飛ばされ、慌てて追いかけようとしたが、疾風のごとく湯俣方面へと消えていった。小椋の不注意ではあるが、バテバテでさんざん彼に迷惑をかけている僕としては何も言えない。人間ができていないので、もしバテずに迷惑をかけていなければ、ボロカスに彼を責めていただろう。しかしテント生活がこれほどありがたいと思えた日はなかった。

２００３年１２月３０日（火）　曇り～晴れ

２：００－３：００（雪かき）～５：４５（起床）～７：００－８：００（雪かき）～９：００（出発）　～１０：００（東沢乗越）～１１：３０－１１：５０（水晶小屋）～１２：５０（東沢乗越）～１４：１５（テント場）

小椋：　少し重いがしばらく我慢していたら、いつの間にか体の半分が雪の下。あわててみんなを起こす。テントの床から５０センチメートルほど埋まっただけにもかかわらず、雪の圧力は想像以上に強く、入り口をふさいだ雪のため中々外に出られず隙間から這い出した。　片岡さんの指示により、テントの周りをぐるりと一周５０センチ以上スコップで掘り下げるが、風雪が激しくて、掘り下げたはなから埋められてしまう。気がつくとテントもダメージを受けていたが、それほどでもなかったのでそのままにしておいた。一時間ほどで切り上げる。雪山のテント生活のつらさをつくづく感じさせられる一晩だった。

木野：　リーダーがなにやら騒がしいので、目を覚ますとそこには雪の塊が。ここってテントの中だよなあと思いつつ、よく見ると圧死しかけたリーダーの姿が！もう少し早く起こせと片岡さんに怒られていたが、気の優しい彼のことだから熟睡している二人を起こせなかったんだろう。ちなみに僕はテントの真ん中だったので快適だった。

小椋：　明るくなって外を見ると、雪はあがっていて空も明るかったが、ホワイトアウトしているので水晶岳のアタックはしばらく様子を見ることにし、その間にもう一度雪かき。しばらく待った後、天候はよくなってきているという判断の元、出発。今回の山行の最大の山場ということもあって、やや緊張していた。歩き出して間もなく横からの冷風により顔半分が凍り始めたので、初めて目出帽をかぶる。東沢乗越までは稜線上の雪はしまっているし、トラバース斜面の雪は柔らかいしで楽勝だったが、そこから先はずっと稜線を巻く感じで、何箇所もツルリとした斜面のトラバースがでてきて、その上アイゼン調節もうまくいかず、しきりにはずれそうになるので、頭が東沢に滑り落ちる恐怖に満たされてきた。それでも天候も回復したこともあって水晶小屋に到着。でもここまでが限界、これまでの様子を見ているとやめておいたほうが無難じゃないかなあと、片岡さんも言ったので水晶岳登頂はあきらめた。

帰りの道はわりあい平気に歩け、水晶・鷲羽・

10

槍はもちろんはるか北には立山三山も眺められたので、上天気の雪景色を楽しみながら余裕を持ってテント場まで戻った。

木野：　ここまでの僕の様子から、この日はテントキーパーをすることになった。正直言ってホッとした。この時点ですでに精神的・体力的にクタクタになっており、前日から、「明日はテントで留守番したいんですけど。」と言っていた。もちろんその時、「それはお前が判断することではない。」と片岡さんに一蹴されたのは言うまでもないことだが。冬山では明日のことは明日しかわからない。その都度ベストな方法を判断しなければならず、前もって決めることはできないことぐらいわかっているつもりだが、やはりどうしても先のことを考えてしまう。

二人を見送った後、天気図を書いたり、中途半端に残ったガスを利用して水を作ったりしていたが、それでも時間を持て余してきたので外で写真を撮ったり雪かきをした。前日ほど天候が悪くなく、疲れることも危険も少ないので、思う存分雪遊びを楽しんでしまった。水晶アタックに参加できない悔しさも少しはあったが。

後で知ったことだが、リーダーは水晶アタック記念の旗をテントに忘れて行ったらしい。彼らしいといえば彼らしいチョンボだが、結局水晶小屋止まりだったので持って行かなくて正解か。彼が自力で旗をデザインしたことに感動すらしていたというのに、忘れるか、普通。

２００３年１２月３１日（水）　風雪

５：４５（起床）～８：４５（出発）～９：５０（野口五郎岳）　～１２：３０（引き返す）～１３：３０（野口五郎小屋）

小椋：　残りの行程は、今までのものに比べたら楽だろう、今日明日でもう下山できるだろうと考えていたが、大間違いだった。出発して間もなく吹雪となり、そのため真砂岳直下の分岐で野口五郎方面の道が見つけられず、とうとう片岡さんにトップを代わってもらった。風がひどく、立ち止まって踏ん張っていないと吹き倒されてしまうほどのものがびゅんびゅん吹きまくり、雪粒が飛んでくるので目も開けられず、まさに風に翻弄されていると言う感じでよろよろと進んでいった。

一時間後野口五郎に登頂。ごうごうと風がすごく、寒さと風の威力に何となく頭がぼんやりして気力がそがれていく感じ。視界が利かず野口五郎小屋への道ですらはっきりしないので、少し行った所の吹き溜まりで、天候の回復を待ちつつ雪洞を掘ってみる事となった。三人交代で一時間以上かけてやっとみんながしゃがんで入れるくらいのものができたが、作っている合間に片岡さんが野口五郎小屋までの道をみつけてきたので前進することとなった。

２００３年１２月３１日（水）　風雪

５：４５（起床）～８：４５（出発）～９：５０（野口五郎岳）～１２：３０（引き返す）～１３：３０（野口五郎小屋）

小椋：　烏帽子小屋へ向けしばらく黙々と歩いたが、吹雪は一向に弱まる気配は無く、視界も悪く道を間違える危険があるということで、とうとう引き返す。最初は作りかけの雪洞のあるところまで戻るつもりだったのが、視界不良のためどうしても見つからず戻れないので、野口五郎小屋へ変更。風を防ぐため、吹きだまった雪を除雪して小屋の陰にテントを張る。疲れていて体もかなり冷えていたので除雪が大変だった。テントにはいったときは呆然としていたが、暖かい飲み物とお菓子を口にするとだんだん元気が出てきた。人心地を取り戻してから天気図を取ってみると、日本列島を東西からはさむ形で前線を伴った２つの低気圧がいつのまにか現れていて、場合によると悪天が長く続く可能性も出てきたので、食料の食い延ばしを考え、夕食のアルファ米は二人分を三人で分けた。

夜は木野君のもってきた液晶テレビでＫ－１と紅白歌合戦を観賞、曙ｖｓボブ・サップで一通り興奮してから寝た。

木野：　おそらく今回の合宿で最もつらかった一日だろう。風に体を預けても支えられるんじゃなかろうかと思えるぐらいの強風。風雪がまるで凶器のように僕を殴りつけてくる。今自分がどこにいるのかさえわからない。その上この日は朝からアイゼンがガタガタで、数歩歩くたびにずれるアイゼンが僕の疲労を倍化させていた。「こんな所へこんな時期来るやつはバカだ！人間の来る場所じゃない！」とブツブツ独り言を言いながら二人にだいぶ遅れてついていく。もちろん写真を撮る余裕などあるはずもなく、野口五郎岳山頂で撮った１枚があるのみだ。

行きつ戻りつしながら野口五郎小屋そばでテント設営。テント設営がまず先なのに、ガタガタだったアイゼンに当り散らし、舌打ちしなが

11

ら物言わぬアイゼンに文句を言っていた。調整不足だった自分にも落ち度があるのだが、もし今度アイゼンを買う時は、片岡さんのように１２本爪で横ズレにも強い物を買おうと思った。

しかし毎日毎日想像もしていない事が次から次へと起こる。たかが山登りごときでここまで精神的に追い詰められるとは思わなかった。山岳部に在籍していながら今まで頭の中にあった、山登り＝学校の遠足程度という認識は完全に消え去った。いつもなら、「今度はダブルアックスで氷壁登りに挑戦だ！イェイ！」ぐらいの軽口を叩いているはずなのだが、グゥの音も出ない。年末番組用に携帯テレビを持ってきたが、小林幸子の舞台装置は失敗するわ、さんざんもったいぶった演出をした割にはあっさりKO負けした曙にガッカリするわで散々な一日だった。

２００４年1月1日（木）　晴れ～雪

５：３０（起床）～８：００（出発）～９：２０（三ツ岳近辺）～１１：３０－１２：００（烏帽子小屋）～１３：３５（烏帽子岳）～１５：２０（烏帽子小屋）

小椋：　天気はどうなることやらと心配していたが、テントから顔を出すと青空が。思わずホホゥ！と声が出た。

木野：　リーダーと同じく、ホホゥ！とリアクションしたくなるような好天。計画を勘違いして、今日には下山できる！と思っていたため、後でテンションが下がる。

小椋：昨日は何だったんだと思ってしまうほど快調で、あっという間に烏帽子小屋が近づいてきた。が、直前で樹林帯に入り、いきなり雪が深くなったので、アイゼンの上からワカンを装着し、小屋まで１００メートルほどラッセル。

木野：　野口五郎～三ッ岳～烏帽子小屋と、雪深くもなく、風もさほど強くなく、天気も良かった。ものすごく快調だ... と思ったら、烏帽子小屋の直前で雪深くなる。脳裏に湯俣尾根の踏み抜き地獄がよぎる。距離はさほどないので、さっさと小屋まで行きたかったのだが、リーダーが輪カンを履こうと言い出す。傾斜があるわけでもないので、何事も経験だと片岡さんもアッサリ許可。僕も輪カン初体験であったが、それよりもさっさと小屋まで行きたかった。どうせ輪カン履いても雪を踏み抜くのはわかりきっていたし...

小椋：　小屋からは空身になって烏帽子へアタック。樹林帯の夏道は完全に埋まっているので、つぼ足でラッセルするが、雪が深くかなりえらい。稜線にでても広いため、結構雪が積もっているので、ハイ松を踏んづけてなるたけ雪にもぐらないように歩いた。　烏帽子岳に近づくとまた深雪。ひざから胸あたりまでのラッセル登りがずっと続く。頂上直下の５０メートルほどは完全に雪壁となり、片岡さんが先頭を行く。岩は全く出てないものの、急な上、雪が深くてふわふわなので、せっかく足場を作ってもすぐくずれてしまい、じりじり這い上がるようにしてやっと登れた。

あと少しというところでリーダー立ち往生。

片岡さん「登れるか？」小椋「登れませ～ん！」

片岡さん「じゃあ引き返すか？」小椋「いえ登ります。」という意味不明のやりとりが。

小椋：　頂上に着くと間もなく、雪が降り風も出てきたので早々に降りる。雪壁の下りはザイルを出した。風雪は帰り道一時的に強まったが、小屋につくころにはほとんど止んでいた。

木野：　下りはザイルを出し、ゴボウで降りることに。行きはヨイヨイ、帰りは... というのはまさにこのことだが、短い距離だったので逆にちょっとめんどくさかった。まあリーダーには来年度から新人を連れて冬山に行ってもらうことになるのだから、いい勉強になるだろう。

小椋：　今夜は冬季小屋を利用させてもらう。テントに比べると、広くて床が平らなので快適と言えば快適だったが、その分寒くて足先がずっと冷えたままで少し寝づらかった。靴が水を吸い始めたらしく、夜トイレに行くときコチンコチンで履くのに苦労した。

木野：　本来は緊急避難用の小屋ではあるが、何事も勉強ということでお借りすることに。小屋内の温度計を見て、「５度か。やっぱり小屋の中だと暖かいなあ... って数字の前にマイナスついてるやん。マイナス５度かよ！」と一人ボケツッコミをした。

ちょっと前にも怒られたというのに、リーダーが片岡さんに、「明日は帰れそうですねえ。」みたいなことを聞いたので、「だから先の事はわからんと言っているだろう！」とまた怒られる。ああ、危なかった。俺もその質問するところだったよ... ここまでくると気分は下山モードだからなあ。

起床後、結構ずぼらそうに見える片岡さん（失

12

礼）が丁寧に小屋内を掃除する姿を見て驚く。最近、こういう当たり前のことが出来ない人間が多くて困る。まあウチの部室はいつもきれいだけどねえ、リーダー。しかし、数日分の食べカス＋小椋毛のついた汚いコッフェルにお湯を入れ、きれいに掃除して飲んだリーダーには驚きを超えて感動した。すごすぎるよ！あんたこそ真の山男だよ！だいぶ山の生活に慣れてきたとはいえ、僕にはまだそこまでの根性はない。

２００４年1月２日（金）　晴れ

５：３０（起床）～８：００（出発）～１４：３０（登山口）～１６：３０（七倉）～１７：００（葛温泉）

小椋：　ブナタテ尾根にはトレースがついてなかったので、ルートファインディングしながら下りることとなった。始めのうちは雪が深くて木の根に足を引っ掛けることも無く、尾根もしっかりたどれたので順調に下れたが、本当に始めだけで、下るにつれ、トラバースやら滑りやすい急斜面のくだりやら、足に引っかかる木の根・岩やらがでてきて、やたらと雪に埋まったり、転んだり、滑り落ちたりし、おまけに尾根がはっきりしなくなってきてルートファインディングも大変になりで、尾根の中盤はとても歩きづらかった。

木野：　あとは下るのみ、ワクワク下山気分で一杯だった。しかしそれは大間違いだということをすぐに知らされることになる。今までで一番雪を踏み抜くことが多かったのだ。しかも下りなので油断すると滑落したり、もがけばもがくほど雪深くはまってしまう。ゴールは近いというのに暗澹たる気持ちにさせられた。リーダーは一生懸命ルートファインディングをしてくれているが、僕はそれどころではなく、ただ二人に必死について行くだけで精一杯。

二人にだいぶ引き離され、頭ではわかっているのにしんどさのあまりトレースのついていない沢筋をショートカットしようとした。案の定、首まで雪にはまり、ザックもはまって引っかかり、どうしようもない状態になった。闇雲にもがいたりするもんだから、ものすごく体力を消費しているのがわかる。首までだったからいいものの、下手すれば窒息してしまう。また片岡さんに怒られた。今回ばかりは今までの疲れも相まってかなりへこむ。もう何も考えたくない気分だったが、怒られた分だけ自分の勉強になるんだと言い聞かせながら何とか脱出。でもやっぱりしんどい。

木野：　この道でいいんですかねえとしきりに振り返って片岡さんに同意を求めるリーダー。無理もない。正直こんな尾根ごときナメていたが、尾根を少し間違えただけでも戻りがかなりつらい。なるほど、偵察山行で印をつけておく理由が良くわかる。夏道が全く見えず、雪深い上に、細かい尾根がたくさんあるこういう所ではルートファインディング能力は非常に重要だ。まだ視界が良かったからいいものの、これで視界不良だと最悪だ。

二人に遅れること数十分、ふと下を見ると小椋のザックだけポツーンと木か何かに引っかかっている。「はて？」と思いつつしばらくすると本人がさらに下から登ってきた。どうやら滑落した際にザックだけが引っかかって本人はスポーンと滑っていったようだ。なんだかロボットヒーロー物の出動シーンみたいでちょっと笑えた。

小椋：　最後の標高差２００メートルほどは広い斜面なので自由自在に歩け、雪が無いときよりずっと早く下れたので、もう終わりだあ、と思っていたら最後の最後に雪と岩の壁にぶつかった。荷物を背負っていると危ないと言うことで、先に荷物をすべり落とし空身で慎重に下降。１０メートルほどだったが、最後にえらく緊張させられた。ここを降りようやく下山出来たと実感した。

木野：　リーダーに続いて慎重にクライムダウン。落ちてもどうって事はなさそうだったので、さほどドキドキ感がなかったのがちょっと残念。でも無事降りたときにはホッとした。片岡さんと固い握手を交わし、感極まって涙が出そうになった。そういえば小椋とは握手したかなあ？僕としては二人と抱き合って喜び合いたいぐらい感動していたのだが。

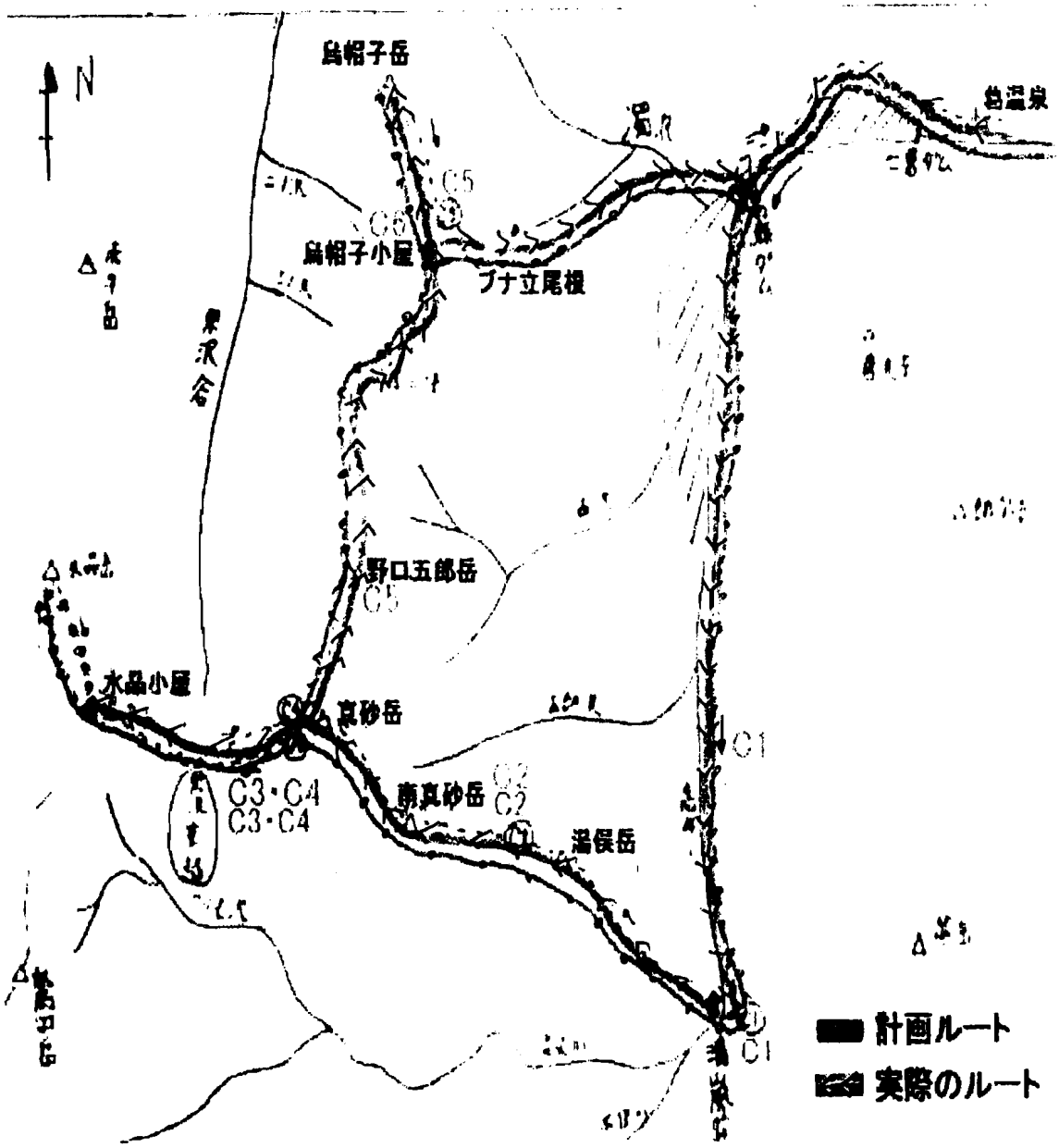
あとはただひたすら歩くだけなのだが、こういうのが一番苦手だったりする...

小椋：　後は長～い林道歩き。唐沢岳を眺めながらテクテクテクテク葛温泉まで歩き、着いたころには薄暗くなっていてお月さんがよく見えた。

木野：　カラダというのは現金なもので、下山した途端に節々が痛み出す。特に足の指に水ぶくれや違和感を急に感じる。最後の最後で片岡

さんに大きく引き離される。過去にご一緒させてもらったハイキングなどでも感じたことだが、片岡さんは平地での歩行スピードが異常に速い。でも競歩みたいにいかにも早歩きしてます！という感じでもない。普通に歩いて速いのだ。内心、「おいおい、若者がこんなオッチャンに負けてていいんか！」という気持ちがあったのだが、心身ともにヘトヘトで無理だった。葛温泉で湯船に浸かったとき、「ああ、日本人に生まれて良かった～！」と心から感じた。

今回の合宿は今までのどの合宿・山行よりも勉強になることがたくさんあり、得た物が大きかった。片岡さんが心・技・体ともに非常に優れた素晴らしい登山家だということもものすごくよくわかった。そして小椋もすごいやつだということがわかった。彼は磨けば光るダイヤの原石だ（言い過ぎか？）。これからも様々な経験を積んでいけばきっと良き山岳部リーダーになるだろう。さらば冬山よ！



14

八ヶ岳編

（赤岳―阿弥陀岳、横岳―硫黄岳）

<メンバー>　兵頭　渉　（OB），澤　真平（現役）吉村　治代（準会員）

文責：澤真平

<１２／２８日>　ほぼ予定通り、美濃戸口を出発しました。風邪が未だに完治していませんでしたが体調も特に落ち着いていて、雪の中の山行を楽しめました。ただ美濃戸小屋でゆっくりしすぎて到着が遅れてしまい全行程の三分の二ほどのところで暗くなってしまい、ヘッドランプを着用。テントを張る予定の行者小屋に着くころには６時をまわって７時近くになっていました。慌ててテントを張って食事を作りました。一日目の食事は豚汁とご飯。寒い中で食べる豚汁はとても暖かくおいしかったです。しかし、夏用のテントで風の遮断率が悪く、夜間の山行で疲労が溜まっていた事もあって一日目は行者小屋で泊まることになりました。冬のテント生活も楽しみだったのですがこういう風に山小屋で泊まるのも初めてだったので新鮮で良かったです。

<１２／２９日>　前日の疲れもあり、少し寝坊。朝食にうどんを食べ、予定よりも少し遅れて行者小屋を出発しました。朝から天候も良く、雲ひとつ無い絶好の天気に恵まれました。予定では阿弥陀岳を先に往復する予定だったのですが、先に赤岳登頂を目指しました。途中、強風にあおられるところが一箇所あったものの無事に頂上に到着。頂上の小屋で一休みしました。朝からの快晴も続いて、辺りを一望する事ができ、美しい富士山を拝む事ができました。その後阿弥陀岳の登頂を始めました。赤岳の登頂のときとは変わって岩場を登っていくような道で、夏に登った岩場とはまた違った楽しみがありました。頂上についたところで富士山をバックに写真を撮りました。一休みしたあと下山。前日とは違って三時すぎには帰ってくる事ができましたので余裕を持って夕食の準備にとりかかることができました。メインディッシュは吉村さんに持ってきていただいたビーフシチュー。とてもおいしゅうございました。そののちゆっくりと今日の山行の成功を祝いながら、談笑。それが油断だったのかもしれません。さてやかんでお湯を沸かそうかというところで、生ガスが出たのか、コンロの火が急に大きくなり兵頭さんの衣服に引火。続いてテント炎上…。幸い、大事に至る事はなく、兵頭さんも軽い火傷ですんだようです。ぼくはというと逃げ遅れて酸欠。テントを失った我ら一行は仕方なく前日と同じく行者小屋に泊まることになりました。小屋のお姉さんに「初めから泊まっていればテントも燃えずにすんだのにね」などと痛いところをつかれるものの、もうすでにあとのまつり。気を取り直してその日も暖かいふとんで眠りました。

<１２／３０日>　前日のこともあったので行動の予定を変更。今日は予定通りの山行を終えたのち、少し無理してでも下まで下山するという事になりました。そういうことでとりあえず朝食のラーメンを食べたのち、出発しました。前日同様、天候に恵まれたのですが思いのほか風が強い一日になりました。横から台風なみの強い風に殴られ、ときにはピッケルにしがみついてじっとしていないと飛ばされてしまうようなこともありました。岩陰を縫うようにして風を避けながら進み、横岳頂上に到着、そこで軽く昼食をとりました。その後、硫黄岳に向かったのですが、周りに岩などの障害物が無く、強風が直接たたきつけてくるような道が続きました。吹き荒れる暴風の中、なんとか硫黄岳に到着。その時点でかなり予定から遅れていました。その後急いで赤岳鉱泉まで下り、なるべく昼ごろには着きたかったのですが、行者小屋に着くころには３時になっていました。部分的に燃えて穴の開いたテントを片付けてから下山。美濃戸の駐車場についたころには８時近くになり、またもやヘッドランプをつけての夜間での山行となりました。美濃戸の駐車場には８時に到着しました。今日の山行は 12 時間に及ぶ長い道のりとなりました。その日は雪線に泊まりました。

残雪の山スキー（雪倉岳東面、金山沢）

.２００４年4／２８－5／３　　Ｓ４０年卒　上田　忠士

4／28　華麗さを求められるゲレンデスキーは向かないので、山スキーにでかける。
午後名古屋を１人出発。白馬乗鞍のスキー宿に泊まる。

4／29　宿を５時に出発。猿倉よりツアー仲間とシールを着けて歩く。白馬大雪渓上部で傾斜がきつくなったあたりからスキーを担ぐ。約１時間の登りで再びシール登り。6時間30分で白馬山荘到着。山荘は本日から営業開始。

4／30　山荘出発7：30．旭岳とのコルから柳又谷の源頭を滑降。雪はややクラストしているが傾斜あ 25 度位で快適だ。途中、右の小尾根を越し、大斜面をトラバース気味に鉢が岳と三国堺とのコルを目指して滑る。コル手前スキーを担ぎブッシュこぎ4－5分でコルに出る。休憩の後、雪倉小屋を目指して鉢ガ岳の東面を大トラバース。小屋からは40分雪道を登り雪倉岳頂上へ。

滑降体制を整えて、大斜面にシュプールを描く。斜度 25－30度、高度差1000m、3000mの長さだ。雪の状態は悪くないが、そこは山スキー。新雪面、黒い雪面があり、ガクンとスピードが落ちるところがある。雪倉の滝は切れており、ブッシュの小尾根を右に越えて狭い急斜面を滑って瀬戸川へすべりこむ。崩れかけたスノーブリッジを渡り右岸へ。この時期の渡渉点はここだけらしい。

シールを着けて50m位登り、高度1550mをキープしてトラバース、１時間位あるいたら蓮華温泉が見えてきた。温泉到着14:50．温泉につかりビールで乾杯。

5／1（晴）　このまま木地屋へ下山する気になれず、数人で天狗原へ振子沢を登る。
温泉発7：30．スキーツアーコースの逆である。３時間強で天狗原へ。昼食のあと栂の森まで滑降、ゴンドラで下る。

5／2（晴）　天気が良いのでツアー仲間と２人でもう 1 本と金山沢へ出かける。ゴンドラ、ロープウェイで栂池自然園へ。ここからシールをつけ、稜線直下はスキーを担ぎ、３時間弱で船越の頭（2610m）へ到着。雪庇の出てない所を探し、急斜面に滑り出る。斜度40度位か。雪面を切った足先からザラザラと雪崩がおきる。転倒しないように気をつけ2301mの台地で大休止。あとは広く明るい金山沢を快適に滑り、白馬沢との出会（1450m）へ出る。林道を滑って猿倉へ。猿倉は車で一杯であった。

5／3（晴）　雨飾山登山。
5／4（雨）　大町の山岳博物館へ寄り名古屋へ。

16

総会が開催されました

平成１６年４月１７日[土]　大阪弥生会館にて

現役４名含む３０名の参加の下、総会が盛況の中で終わる事ができました。本年は幹事役員の改選時期となり、下記の方々への役員をお願いする事に」なりました。
紀行報告としては武部　秀夫さんに「ランシサリの登頂報告」を多くの写真を活用して行って頂きましたが素晴らしい写真に感動させました。
平成１６年度新役員人事及び　新会長挨拶
平成１５年度会計報告及び「ヒュッテ雪線」会計報告
平成１５年度活動報告
につき下記御報告いたします。

大阪市立大学山岳会

新役員人事

２００４／４／１７

平成７年度以来、山岳会会長として、種々お世話になってきました池永会長が、辞任される事となりました。長年にわたるお世話とお心使いに深く感謝いたしますと共に、引き続き名誉顧問として暖かく見守って頂ける事をお願い申し上げます。

今回の人事の変更内容は下記の通りであり、川勝会長、藤本副会長、佐藤幹事長の下、お世話願う事となります。皆様方の御協力をお願いする次第であります。
特に、今年からは雪線運営委員会を廃止して幹事会１本として機能させる事となり、雪線総括として久保田氏に当たって頂く事になりました。

新会長	川勝　弘一
名誉顧問	大橋　秀一郎　　池永　薫爾
副会長	藤本　勇
顧問	小笹　孝　　佐々木　惣四郎
幹事長	佐藤　一良
監査役	廣瀬　秀雄
	（一般・特別会計監査）
	奥田　寛
	（雪線会計監査）
幹事	
総務幹事	藤村　達夫（ＯＣＵＳＡ担当）
	福山　昇二
	八木　信男
	（山岳会ニュース編集発行）
企画運営幹事	山田　裕敏
	上堂　竹壽
	大島　一恭
	島川　勝
会計幹事	小松　稔
	上田　忠士
	（ヒュッテ雪線関係）
山岳部指導幹事	佐々木　惣四郎
	山田　裕敏
	兵藤　渉
	片岡　泰彦
	八木　信男
	尾形　達也
山岳部長	小林　治俊
	（JAC 関西支部担当兼任）
東京支部長	広谷　光一郎
ﾋｭｯﾃ雪線総括	久保田　淳三　兵藤　渉
	（ヒュッテ雪線運営委員会の廃止）

17

新山岳会会長挨拶　　Ｓ３２年経済卒　　川勝　弘

この度大阪市立大学山岳会の会長をお引き受けする事になりました。

池永前会長と佐々木前幹事長には長い間いろいろと会の為にご尽力いただき真にありがとうございました。しかし正直なところ自分が会長という重大な役目を背負うことは大橋.

池永両歴代会長のことを考えてみますと、その責任の重さをひしひしと感じることでございます。

京都からポッと出てきて市大に入り山岳部に入部・卒業して山岳会の会員として多くの先輩や友人の皆さんに学びながら成長できたとすれば、そのお蔭であるとつくづく思う昨今です。

それからすれば微力ではありますが、何か山岳会のお役に立てればと古い表現ですがご恩返しが出来ればと存じております。

幸い新体制では副会長にベテランの藤本氏がいてくれますし新幹事長には佐藤氏が就任していただきました。また幹事会にはわが山岳会の中心で活躍していただいている錚々たるメンバーを擁しておりますので、この方々のお力を借りて次世代への引継ぎまでつなぎとして、この大任を勤めさせていただきたいと存じます。

わが山岳会も会員の平均年齢が高くなり、その活動も今後これを考慮しながら運営して

行かざるを得ないことと存じます。しかし昨年から、今まで途絶えていた現役部員に数名の入部があり　山岳会の将来にも一縷の光が見えて参りました。

しかし、部員が在籍しているといっても指導者がいないので年齢のかなり隔たったＯＢが指導に当たっているのが現状です。これを何とか成長してもらえるよう山岳会としても努力しているところが現状でございます。まずこのような事で皆様のお力添えをいただいて役目を果たせればと願っております。

簡単ではありますが、これを以ってご挨拶とさせていただきます。

以上

ヒュッテ雪線 利用の手引き

1．概要　大阪と東京の中間、信州伊那谷に有ります。

ﾋｭｯﾃ雪線は、大阪市立大学山岳会会員及び賛助会員により「自分達の山小屋が欲しい」として1997年6月建設されました。以来、四季折々登山ハイキングスキーの基地としてはもちろん、信州方面の温泉巡り・観光旅行・ドライブの基地として、また会員相互の懇親の場として家族友人を含め幅広く利用されてきております。

2．利用申込 Tel 052-723-2041or(-8666)、Fax 052-723-2140 HP http://www.happy.net/OCUAC/

「1961年卒の久保田」までTel又はFaxにて連絡下さい。詳細居り返し連絡致します。尚、ｲﾝﾀｰﾈｯﾄしておられる方は山岳会のＨＰを呼び出し、「ﾋｭｯﾃ雪線」→「ﾋｭｯﾃ雪 線の伝言板」をｸﾘｯｸし記入下さい。(管理人久保田に鍵の受け渡し他何でもお尋ね下さい)

3．利用料金　1泊/1人当り

@1,000円＝会員・賛助会員及びその配偶者・子供・子供の配偶者
@2,000円＝知人・友人・会友及び会員・賛助会員の親・兄弟・孫・曾孫
@無料　＝2才以下の幼児
支払方法　郵便振込　名義；雪線友の会、記号；12110、番号；81277851

4．アクセス　長野県駒ヶ根市赤穂駒ヶ根高原別荘地46号地 Tel0265-82-4818

マイカー　高速中央道駒ヶ根ＩＣより西へ5分（吹田ＩＣより4時間弱）
高速バス　高速中央道駒ヶ根ＩＣ下車、徒歩15分（梅田より2本/日、東京・名古屋より1本/時間）
どちらも西へ「光前寺」を通り過ぎ、大沼湖前国民宿舎「すずらん荘」を目指し、南隣ユースホステルの横の駒ヶ根高原別荘地の地図を確認下さい。46号地です。

5．利用心得　会員制別荘（但しセルフサービス）の感覚でご利用ください。電気・水道・ガス完備
持参物；シーツ・枕カバー。到着されたら水道・ガスの元栓を開けてください。
食器・冷蔵庫・寝具・暖房設備あり…元栓の開閉方法・設備の使用方法等は山荘内に提示
宿帳へ記入下さい。山荘日誌は諸々情報の宝庫です。（美味い物屋・買出し店他）

6．登山基地情報　車での所用時間（前日泊早朝発で利用下さい）

中ア；ﾛｰﾌﾟｳｪｲで木曽駒宝剣（下から歩くのも良い）、池山遊歩道(2～4hrのﾊｲｷﾝｸﾞ、眺望良)
古城林道終点(空木)、七久保(越百)、桂小場（西駒）…0.5～1hr
南ア；戸台（北沢峠甲斐駒千丈）、鹿塩（塩見・赤石）、上村（聖）…1～2hr
北ア；沢渡（上高地～）、安曇野・中房（燕～蝶）、大町・白馬（後立）…1～2hr
北ア；新穂高（槍・西穂）…2hr、折立（薬師・雲ノ平）…2.5hr、千寿ｹ原（立山）…3hr

7．日帰り観光情報

温泉；早太郎温泉こぶしの湯（歩5分）・こまくさの湯、松川温泉、他近隣に多数
花見；古城公園（歩15分）、光前寺のしだれ桜、高遠城址公園、新緑紅葉は何処でも
ドライブガイド；大平宿峠経由妻篭・馬篭宿、権兵衛峠経由奈良井宿、杖突峠、分杭峠、鹿嶺高原、しらびそ高原、上村、等々

8．その他…利用規定が別途定められてますので詳細を知りたい方は幹事に連絡下さい。

臆病者の遠吠え

和田城志

深夜にわめく男がいた。「朝鮮人を殺せ。おまえらぬるま湯に浸かって、何をやっとるんじゃ、、、ハイル・ヒトラー」と怒鳴りながら、住宅街をうろつく。腹に据えかねて、注意をしに外に出た。案の定、喧嘩になった。警察を呼ぼうとしたら、手の平を返すように、謝りだした。右翼だという、執行猶予中だという。

私はこの頃、気が短くなって、よく喧嘩をする。高校生が相手の時が多いが、たまにはサラリーマン風の酔客ともやる。話して分かるような奴じゃない、と思い込んでいるせいだろう。超ベストセラー、養老猛の「バカの壁」を読んだが、内容はともかく、彼の思い込みも深刻だ。人間は分かり合えない、と言っているに等しい。私の短気も、彼と同じ状況なのだと、変に納得した。がしかし、この本には、だからどうすればいいのか、という示唆がない。インテリの遠吠えが流行るようでは、先行きがちょっと不安だ。世界は戦争に馴らされている。皆、バカの壁にぶち当たって、威勢振る。力の誇示は常に心中の脅えの裏返しだ。この右翼もイラクのアメリカ兵と同様にびくびくしているのだろう。

ポール・ヴァレリーの言葉に「人は、他者と意志の伝達がはかれる限りにおいてしか、自分自身とも通じ合うことが出来ない」というのがある。心当たりがある。良い言葉だ。養老猛は、「バカの壁」が自分にも例外ではないと、科学的説明でバランスをとろうとしているけれど、本当は「バカの壁」は、もともと相手にあるのではなく、自分にだけあるのかもしれない。自分の臆病さ加減に意を凝らせば、物事の本質は自然に浮かび上がって来そうに思うのだが。

臆病と言えば、その最たる部類の人間にアルピニストも含まれる。アルピニストが敢えて危険に身をさらすのには理由があるはずだ。それは決して、健康促進や風光明媚探勝のためではない。生活（仕事）の充実を前提とした余暇としての登山は、ある種毒気を中和された知的活動で、ぬるま湯的なのだ。だから、登山愛好家はアルピニストとは言わない。　アルピニストを極言すれば、死の戦慄を意識した現実生活逃亡者と言える。つまり、臆病者の自己ちゅうなのだ。ビンセント・ヴァン・ゴッホの十年間の画業（美への憧れと死の誘惑と）もアルピニズムに似ているところがある。だから、ゴッホが天寿を全うして描き続けることができなかったように、アルピニストも登り続けることはできない。死ぬか止めるかだ。実際、優れたアルピニストはほとんど遭難死している。

未踏峰だ、八千だ、パイオニア・ワークだ、と言っても、それらは登山の本質的動機ではなく、部外者が登山を理解する手助けにしているだけのことで、当事者はもっと卑近な日常的(時として非日常的な）情動で山に向かっているのである。田口二郎は高木正孝を評して次のように述べている。

「山登りの本質は、その人がすべてを忘れてその行為に一瞬一瞬打ち込むのが本来の意義であろう。そうして高木の場合には、登るという動機と目的以外に、かつて登山を試みることはなかったのではなかろうか。そういう意味で高木は実に完全な登攀者であった」

「 登る」ということが動機であり目的である、という田口の言葉は正鵠を射た言い方だ。高木（つまり、田口自身）がこういう心境で山に対峙していたことは、第二次世界大戦の渦中に苦しんでいた青年達の心情を想像させる。無意識な自己防御が自閉的心空間を作り出していたのだろうか。分かるような気がする。また、次のようにも述べている。

「今にして思えば、高木にとって登攀は山と

いう外界物と、彼に深く内在するエゴのたえまない接線であって、これから生じるドラマチックな複雑な経験の起伏が、登山の同伴者の存在とは全くおかまいなしに、さまざまな心理的振幅を、彼の心の世界に呼び起こしていたに相違ない。いや、彼は自分を登山という〃場〃の実験の具に供して、自分をたえまなく凝視していたのだ」

しかし、高木と田口が臆病者だったかというと、どうも違うような気がする。１９４５年８月、敗戦をスイスで向かえた二人は、ヴェッターホルン北壁を登攀する。この時の二人は、敗戦に打ちひしがれ、自暴自棄に山に向かったのではなくて、来るべき新時代への意気込みを示したのではないか。まったく身分保障のない高木が、スイスの女性を伴侶にして帰国したことも痛快だ。もっともこれは高木が偉いのではなくて、先行きの見えない敗戦国日本を選んだ彼女が偉いのであるが。彼は外国の女性に非常にもてたそうだが、偏狭なナショナリストには思いもよらないスケールの大きな男である。

二年後、アメリカ経由で帰国した二人は、新聞社特派員だった田口は実業に、ベルリン大学に籍をおいていて大使館の翻訳官であった高木は神戸大学社会心理学教室に、それぞれ生活の糧を見出す。そして、今西錦司率いるマナスルの偵察隊に参加して、日本のマナスル登頂への途を拓くことになる。

ひるがえって、自分を顧みると、高木の孤高の精神には程遠いことが分かる。私の登山は社会からの逃避であった。暴走族的単独登攀をやってきたのも、結局はテストの前になると、哲学書や文学にのめり込んで、勉強した気になるのに似ている。

世界は右傾化しつつある。リアリズムを単純な民族主義で理解したつもりになっている。自衛隊の治安出動を匂わして外国人犯罪を取り締まろう、と言った臆病知事がいたが、そういう世の中のきな臭さに苛立ち、暴力を肯定的に見てしまう私自身が、臆病者の遠吠えをしているのだろう。右翼と正反対の立場を信じる私が、その精神構造が似ているというのが、正に私自身の「バカの壁」なのだろう。

だが、私はラッキーである。大言壮語を嫌った、臆病者でない真の登山家を知っているからだ。冠松次郎、宇治長次郎、ヘルマン・ブール、ハロルド・ティルマン、高木正孝、彼らは偉大なる指針を残してくれた。ティルマンの足跡については前号で紹介したが、高木の足跡はまだ詳しく知らない。パタゴニア探検記のみである。高木が失跡した南太平洋マルケサス群島ファツ・ヒヴァ島はゴーギャン終焉の地である。ゴーギャンも妻子を捨て、芸術と心中した点はゴッホと似たようなところがないことはないが、ゴッホのような狂信的フリーソロクライマーではない。彼の南太平洋への逃避行は理解出来る。

私はティルマンのみならず、高木正孝の足跡も辿らなければならない。両者に共通するのはパタゴニアである。ティルマンのミスチーフ号初航海はパタゴニアの初横断を成功させたし、高木は北部氷陸地帯のアレナーレスを初登頂した。行きたいところが次から次へと出て来る。やっと淡路島に上陸できた程度の休日セーラーなのに、法螺話も度が過ぎるか。偉大なる孤高の登山家、ティルマンと高木正孝はともに海に消えた。臆病者の私は彼らに憧れながら、遠吠えするだけで終わるのだろうか。

補筆、小熊英二著「民主と愛国」は、久々にずっしりと感動した本だった。学者が羨ましいと思った。→

リルンの穂先を眺めつつ

北農　祥二

カトマンドゥにも秋がきて、事務所のテラスからも、ランタンリルンのピークが少しだけ、見える季節になりました。

仕事で疲れた目を休めるためにテラスに出ると、ポプラの木の横から、真っ白のリルンの穂先が見えます。

あの頂上を見る度に、森本隊長や、大島健司さんのことが胸を掠めます。昨年４月、JICA のシニア・ボランティアとして、ネパールに赴任する時には、これで、ランタンの墓参りにいけるなと思ったものでした。

しかし、それが甘い希望にすぎないことを、すぐに思い知らされました。
つまり、ランタン谷の入口は、マオイストの部落があり、公用で来ているシニア・ボランティアの私は、休暇であれ、出張であれ、立ち入れない地域であった訳です。

今年の春、広谷さんらの一行がリルンの墓参に来られたのは、皆様ご存知のとおりです。この時は、ヘリコプターで、いきなりキャンジン・ゴンパまでヘリで上がるとのことで、これなら、参加はOKだと思い、JICA 事務局へ旅行の申請をしました。勿論、先輩の墓参りであることも添え書きしていました。

しかし、事務局の判断は厳しく、結果はNO でした。何で…。という気持ちになりましたが、JICA のルールに従わざるを得ません。残念な気持ちで、広谷さん一行をお見送りしたものでした。
すぐそこにあるのに、行きたくても行けない。この切ないモヤモヤは、精神衛生上悪いものです。

そこで、ランタン谷がダメなら、エベレスト街道は？アンナプルナ方面なら？といろいろ想いを馳せましたが、休暇日数が足りず、結局、昨年も行ったことがあるムスタンのジョムソン訪れることにしました。ここは、ヒマラヤを北側から眺められるところです。これには、今年４月から同居している妻の希望も入れたものでした。

ネパールには、秋にダサインという大きな祭りがあり、ほぼ１週間、政府も民間の事務所、商店も休みになります。それを利用しての旅でした。
９月３０日カトマンドゥからポカラに飛び、翌日早朝にジョムソンに飛びました。白雪を被ったアンナプルナ連峰をかすめるように通過して、２０分のフライトでした。

ここまで来れば、マオイストもいない世界で、西欧のトレッカー達ものんびりと歩いています。2,900 メートルに建つ

22

５ツ星のデラックスホテル、ジョムソン・マウンテン・リゾートに３泊してきました。
ホテルの大きな窓からビールを飲みながら眺めるニルギリ（約 7,000m）のヒマラヤ襞は、陽の光に照らされ、圧倒される大きさでした。

ジョムソンから 3,900m地点にあるムクチナートへ馬に跨り、日帰り旅行を楽しむのが、今回の目的です。歩いていくと、1泊2日のトレッキングになるので、四つ足の馬に身を任せることにしました。

朝、６：３０に出発し、チベット高原から流れるカリガンダキの流れに沿って、河原を歩き始めました。こちらで、馬に乗るのは３度目で、手綱捌きもうまくなりました。アラブ系の馬と違って、少し小柄でおとなしいので、楽なものです。

アパームスタンとの境界線のカグベニの近く、エクラバッティから坂道になり、馬はドンドン高度を稼いでいきます。チベット高原につながる峰峰を眺めつつ登っていくのは、気持ちの良いものです。振り返ると、ダウラギリのピークも見えます。

お昼過ぎに、ヒンヅー教と、チベット仏教の聖地であるムクチナート寺院に到着。ヒンズー教徒は、生涯に一度は訪れたいという聖地の境内を一回りして、近くの小屋で遅い昼食。ビールもうまかったですね。

下りは、早いのですが、余りにも急な下りは、馬から下りて歩きました。
カリガンダキに沿ったトレッキングルートで、ここから落ちれば一巻の終わりだなあという地点を何度も通過しました。
出発地のジョムソンに戻った時には、日も暮れて、間もなく通行止めになる時間帯でした。夜間は、軍と警察が警備をしており、トレッカーも地元の人も通行できなくなるのです。

ホテルに帰り、馬には、りんごのチップを、また、世話になった馬方には、ルピーをたくさん弾んでお礼としました。
こんなスボラな旅をしていると、本格的なトレッキングはできなくなりますね。

私の任期もあと、5 ヶ月余りになりましたが、ヒマラヤの山麓をのんびり歩くには、やはり、個人の身でもう一度出直す以外に、望みはなさそうです。そのころには、政府とマオイストの争いも終わっていることでしょう。
ランタンリルンの穂先をながめつつ、せつない想いでしたためました。

編集後記

レイアウトの都合上、ここに編集後記を書くことをお許しください。3 割バッターは強打者だと言われますが、よく考えてみれば、１０のうち３しか成功しないのに評価されることはどうなのか？とふと思いました。偶々、知人が「３割バッターへの挑戦」という古い本を貸してくれました。やはり３割は難しいとあります。同時に一試合で一本ヒットを打てばプロとしては飯が食えると書いてありました。また、長島はスランプの時には打率が下がらないために四球をねらいにいったと書いてあります。

なぜ３割打者が強打者なのか、確率で解明しようとファールを除いて１打席に起こりうるすべての場合の樹形図を書き始めました。しかし、カウント２－０でさえ、その次に起こりうる事象が４０を超え、すべてを書き尽くすには時間がかかり、これは夏休みの宿題にしようと決め込みました。

さて、登山でも 10 回のうち３回計画通りに行ったというのは何割でしょうか。山での３割はどのように評価されるのか？もちろん天気に左右されるという点では、自力で打率を守る野球と同じようには行きません。そして、長島流に、調子の悪いときは山に行かなければ「打率」は守れるという点では同じですが、そんな人はいないでしょうね。野球では出場試合数が足りないとランキングされないので阪神の八木は打率では冠を頂けないそうです。

最近の中高年の遭難記事を見て、計画通りに３割いけば「強打者」だという気持ちでゆったりと行けば遭難はなくならないかと思うこのごろです。

（N 生）